必要にして且つ充分なるもの

田邊正知

『祖訓』「夫れ佛法を學ばん法は必ず先づ時を習ふべし」

不安と苦悶の濁つた渦卷が世界至る所の個人と家庭と社會と國家と國際との間に氾濫してゐる。

凡そ今日ほど人間が人間としての自負を喪失した時は稀れであらう。殆んど凡ての人が物質的苦しみに喘いでをり、精神的希望と創造性とを失つてゐる。人間は最早獨立的な人格を持つ人間的なものではなく、寧ろ事物化された品物に過ぎないかの觀がある。不具化された人間性、破壞された性格、これが現代人の赤裸々な姿ではないか。

最近に於ける「ひとのみち」「大本教」「生長の家」等々、ありとあらゆる宗教的愚昧さや、愚劣な神秘的復古思想の流行、非人間的テロルの跋扈は正に人間性崩壞の徵候に非ずして何であらうか、人間は今や自ら死せる形骸や野蠻人になりさがつてゐるのである。

このやうな苦悶、中世紀的神秘性、無智な野蠻性、無生氣なデカタンスが未曾有の勢を以て支配してゐる時には人間性の擁護、人間性の再建といふ極めて自然な言葉さへ、却つて大膽な革命的な響をすら與へるのである。

今日多くの人々によつて、ヒューマニズムの問題が喧しく論議されてゐるが、全く當然のことでもあり、又甚だ殊勝なことでもある。而して千種萬樣の內容を持つこの言葉の概念は、之をジャーナリズムに委すも、畢竟ヒューマニティの擁護と發展とが强調される点に於て異論はなからう。曰く青年論、曰く個人と全體、國民と人類の對立の新しき議題等々、即ち、溺死者を救ふべく多くの救助船は堂々舳を竝べて出てゐる。しかるに眞先に挺身事に當らねばならぬ筈の宗教家（特に佛教家）の姿は徒らに濁流の中に沒せられてその片影だに見出すことは出來ない。

遮莫、多くの賢人達の主張が所謂濟世到彼岸といふ宗教の責任（佛の意志）をまで果すに必要にして且充分なる渡船であるかどうか、言ひ換へれば、ヒューマニティの擁護發展の爲めには單なるヒューマニズムでは駄目ではないか、宗教にはそのための根本的有力なる立場がなければならぬ筈だ。この問題の反省こそ宗教の死活を握る要点であらねばならぬ。

則ち、之を言ふならば、科學の尊重、客觀的な形式の尊重を不可欠の要素とするヒューマニズムは、眞宗教の檢出、別言すれば事實批判の方法に於てこそ絶對的の必要である、然し乍らたとへヒューマニズムの具体的方法をコムミニズムにあるとしても、眞宗教の眞面目、即ち價値批判の究極に於ては不充分なること言ふ迄もないのである。

私は今この立場に立脚して、且つ一箇のニチレニストとしてこの必要にして且つ充分なるものについての證明を試みんとするものである。それはとりもなほさず眞宗教の宣揚であり、僞宗教への折伏である。約言すればニチレニズムの現代的檢討であり光顯である。以下、ヒューマニティの公正なる自覺的眞相として自我を捉へ來り、こゝに推論の基礎を置いて吾がニチレニズムの嚴正なる反省としやう。

□

凡そ現在に在つては、自我に目唾めるといふ根據のないものは思想として、就中、宗教としては全く存在の意義を持たないと斷言して憚らない。幸ひにも吾人は古今東西を通じ最も自我觀念に徹底した宗教家として、吾祖日蓮聖人を戴くものである。聖人の自我觀念中には、自我の確認、自我の事實批判、自我の價値批判、自我の實現、その全部が具備してゐるものと信ずる。聖人の研究範圍は所謂梵漢和の三國に行はれた儒外内の三教に過ぎぬのであるが、しかるに聖人の識見は、正に宇宙を呑吐する概がある。

「日蓮は、日本第一の法華經の行者なること、あゑて疑ひなし　これを以て推せよ、漢土月支には、一閻浮提の内にも、肩をならぶる者はあるべからず」（撰時抄）　一二三六

蓋し、この一語は千金の重みを以て聖人の自我觀念を裏書するものである。乃ち聖人夫れ自身には他の之を奪はんとして奪ひ得ざる强い〳〵自我觀念の上に自己の教宗を建設し、そしてその實現に努力せられた偉聖であることが窺へるのである。

□

しかし聖人は固より佛教の宣傳者である。自己の理想に佛陀といふ最高人格者を確認して居つた。しかも幼兒が慈父悲母を戀ひ慕ふその如く、憧憬の熱火は天をも焦さんばかりであつたのも事實である。そは誰れなるか、言ふ迄もなく、全佛教の教主であり久遠の生命者であり、一切人類の先覺者であつた。即ちその御名を釋迦牟尼佛と唱へ奉る。

「我等が本師教主釋尊は、五百塵点劫より已來、妙覺果滿の佛なり（即ち先覺者としての釋迦牟尼佛を擧ぐ）。此土の我等衆生は五百塵点劫より已來、教主釋尊の愛子なり（即ち釋迦牟尼佛を慈父悲母として戀慕する眞情を語る）」（法華取要鈔）一〇三八

とも、

「ひとり、三德を兼て恩ふかきは、釋迦一佛にかぎりたり」（即ち釋迦牟尼佛を絶對の恩德者として仰ぐ）（南條御書）五一七

とも、

一日蓮が頭には、大覺世尊かはらせ給ひぬ」(即ち釋迦牟尼佛の加護の威神力を仰いで立つ)(乙御前御書)　一二三九

とも云はれたるに徴しても、聖人の仰がれた客觀の理想的最高人格者は、釋迦牟尼佛であつたことが知れやう。また、これによつて何人もこのことを疑ふ餘地はなからう。

しかし乍ら、人若しこれを見てたやすく我聖人を客觀宗であるかの如く、速斷するものありとせば、そは全く聖人を理解しないものである。何んとなれば、客觀の實在として釋迦本佛を憧憬するものは、元々、自己の自我確認の上に、事實批判の結果に得たので、全く合理的自我觀念の賜であるからである。また、合理的事實批判の結果とすれば、そは認識的價値批判の前提であるのは言ふ迄もない。見よ、既に「我等が本師」又は、「日蓮が頭に」と云はれてあるではないか。「本師教主」の上に「我等が」と云ひ「大覺世尊」の上に「日蓮が頭に」と云はれた語に着眼したならば、そこに、理想の本佛を自己の主觀に價値付けてあり、自己自身が理想の人格者の所有主であることを物語つてゐるではないか、即ち、理想の本佛釋尊を「日蓮のもの」として見る所に、聖人の自我觀念が躍動する。さうして、自己の自我觀念の通りに、體驗の世界を造り上げやうとして、懸命の努力を惜しまなかつた所に、聖人の自我實現の境地は展開する。

□

先づ順　序として事實批判の教義から述ぶれば、我聖人が釋尊の説かれた教法論や佛陀論につき、その教法の高下淺深を判じその佛陀の勝劣麤妙を釋し、そして、その低きを捨てゝ高きに就き、劣を簡んで勝を取り、淺より深きに進むべく仕向け、遂に全佛教の歸一する所は、釋迦本佛の自我と、その本法とに外ならないとしてあるが、もしも、これを嚴格に甄別するならばこれ等の論述は、事實批判の教義であつて、その實、價値批判の領域には這入らない。

即ち、

「天台宗より外の諸宗は、本尊にまどえり。倶舍、成實、律宗は、三十四心斷結成道の釋尊を本尊とせり。天尊の太子、迷惑して我身は民の子と思ふが如し、華嚴宗、眞言宗、三論宗は勝應身に似たる佛を本尊とす。天王の太子、我父は侍と思ふが如し。華嚴宗、言眞宗、釋尊を下て種姓もなき者の法皇の如くなるにつけり。淨土宗は、釋迦の分身の阿彌陀佛を有緣の佛と思ふて、教主(釋尊)を捨てたり。禪宗は、下賤の者一分の德ありて、父母を下ぐるが如し。佛をさげ經を下す、これ皆、本尊に迷へり。例せば、三皇已前に父を知らず、人皆、禽獸に同ぜしが如し。壽量品を知らざる諸宗の者は、畜に同じ不知恩の者なり」(開目鈔)　七九一

これは我聖人が、約宗から見た全佛教の佛陀觀で、即ち事實批判の教義である。例令、久遠の釋迦本佛に歸一すべく論明してあつても、此等の教義を以て、直ちに、聖人の佛陀觀に於ける價値批判と見るのは早計である。何となれば、佛典の客觀にあ

らはれてゐる佛陀を、そのまゝ諸宗のものが、移して以て佛陀觀としてゐるのであり、壽量の本佛であつても、客觀の經典にあらはれてゐるのである。歸一する佛陀も、歸一される佛陀も共に客觀の事實であつて、何にも、聖人の自我觀念に價値付けるまでの段取りになつてゐないからである。此等の批判詮考は畢竟、自我觀念を徹底させる前提としての事實批判に過ぎない。事實批判の教義と價値批判の教義とを混じてはならぬのである

「次第と淺深とに迷惑せば、其人は我身に五逆を作らずして、無間地獄に入り。これに歸依せん檀那も阿鼻大城に墮つべし」（神國王鈔）一三五八

と、移して以て今の訓とすべきである。則ち、客觀的事實批判の教義は、遂に主觀的價値批判に攝取されて、そこに始めて、價値付けられるものであることを銘記せねばならない。

□

然らば、我聖人の價値批判の教義とは如何。

「壽量品に云く、然るに我實に成佛してより已來、無量無邊、百千萬億、那由陀劫等と云云。我等が己心の釋尊、五百塵点乃至所顯の三身にして無始の古佛なり」（本尊鈔）九三九

これで始めて、憧憬された客觀的理想の釋迦本佛が、聖人の自我の主觀に價値付けられたと云へるのである。即ち、客觀の事實批判に於て、詮考された釋迦本佛が、そのまゝ、聖人の自我に取入れられて「我等が己心の釋尊」となるのである。「乃至所顯の三身、無始の古佛」がそのまゝ「能顯の五百塵点久成の本佛」に價値付けられ、そのまた、久成の釋尊が、そのまゝ「日蓮等の己心」に價値付けられるのである。かゝる生佛觀、即ち神人觀が、我聖人の自我觀の基本的確認となつて、そこに始めて、

「妙覺の釋尊は、我等の血肉なり。因果の功德、骨髓にあらずや」（本尊鈔）九三九

と云へるやうになるのである。哲學でも宗教でも價値批判に根底をおかないものとすれば、それは盲目的感情の支配下にあるもので、何等の價値も權威もない。

□

哲學でも宗教でも價値批判が事實批判よりは一歩進んだ研究である。しかし、それは事實批判の過程を踐んだ價値批判に於てのみそれが云へるのである。過去現在を問はず、所謂一般の宗教は概して事實批判の過程を無視して、獨斷と神秘の蔭に隱れ、强いて、價値批判に類する教義を立てやうとしてゐる。如何にその名を價値批判に借りても、その實、自我觀念の眼から見れば、一顧に値しない。基督教の神人觀や佛教諸宗の佛陀觀は、如何に强辯と舞文の勞を費しても、到底價値批判の仲間入は出來ない。何となれば既に業に、合理的事實批判の途上に於て神の存在も阿彌陀佛や大日如來の實在も、そゞろに否定さるゝ運命に支配されてゐるからである。乃ち、人格的神が全智全能で、宇宙の創造者であるならば、造られた宇宙萬有は、總てが全的であらねばならぬ筈であるのに、それを宇宙は不完全で

あり、人は罪の子であると斷定するのであるから、事實批判の裁判に出ては、到底、矛盾と扞格とを脱れない。理性を缺いた神佛の實在は、獨斷と神秘の外に、肯定さるゝものではない。それに、人格的に神や佛の實在を證明しやうと云ふには、事實批判の要件として、人間の歴史的事實がなくてはならない。即ち、自我の合理に基いた事實でなくては、人格的實在は成立しない。基督教の神や佛教諸宗の阿彌陀佛や大日如來には、人間としての歴史を持たない。このことは、何人の手でも增減の能きない歴史其物が立派に證明してゐる。隨つて、人格者としては根本的に事實批判の合理性を有してゐない。かくの如き無批判の神や佛陀を擁して、愛や慈悲を附會しても、またこれを信じて價値付けやうとしても、事實批判の前提に於て、否定されてゐるのであるから、その名は愛と言ひ慈悲と稱へても、その實、美名を借してゐるに過ぎない。また、かゝる神や佛陀を信じて、これを價値付けやうとしても、元々、沒我の觀念から割出した盲目的感情に過ぎないから、自我の合理に由て築きあげられた價値批判と、固より同日に論ずべきではない。

動もすると、比較宗教學や歸納的研究では、言現しの言葉が同一なる点より、その間に共通性を見出し、さうして同一の結論に到着しやうとする傾向がある。しかし、事實批判の前には何等の權威を有するものでもなく、價値批判の範圍には容易に入り得るものではない。されば明滅常なき類似宗教は言ふに及ばず、これが溫床ともいふべき既成宗教の多くは、全く美名に

隱れたゴマカシであり、一個の悲喜劇であり、反文化的毒素であると宣告して過言ではなく、これが徹底的折伏と殲滅こそ人類の急務であり、吾人の責任である。

□

然るに、我聖人の宗教は所謂、東漸佛教の發達その極に達した我國鎌倉時代に於て、大乘佛教最後の結論として、生れ出でたるものなるが故に、その基礎を自我觀念の確認の上に置いて總ての教義が組織されてゐる。たとへ教相論の事實批判でもその根底は必ず觀心論の價値批判の見地より出てゐる。聖人の中心著書たる「觀心本尊鈔」の始終を見れば、明らかに看取し得るが如く、即ち「觀心本尊鈔」は、支那天台の「摩訶止觀」にあらはれた、一念三千の自我觀念に筆を起し從淺至深の序を逐ふて、初めに、自我の確認を得るために「我等己心」の自我に十界の客觀界を具する所以を反覆し、次に、事實批判に移りて諸經諸宗の差別觀を經めて、これを「諸佛」としてあげ、法華經の一體經を經めて、これを「釋迦本佛」として示し、三に價値批判に及んで、本佛釋尊の依正と一切衆生の依正とを一體ならしむ、所謂法體の四十五字で、一體觀を悉く自我の主觀に價値付け、最後に、自我實現の象徴として、價値批判の一念三千を經體の五字に卷き收め、それを所信の本尊として光顯されてゐる。

かくの如く、我聖人の宗教には、一念三千の觀心に、自我の確認と、事實批判の理性と、價値批判の認識とを以て教義の内

容となし、この自我觀念の哲學を、宗教の信仰的象徴に具體化したものを本尊とするのであるから、本尊は聖人の自我實現の象徴である。これで我聖人が過去の宗教を葬り去つた權威と新に完成された宗教の面目とが、髣髴するであらう。

□

哲學は本尊の自我實現を内にして、觀心の自我を表として立ち、宗教は觀心の自我を内にして本尊の實現を表として立つべきものである。我聖人は元より宗教家であるから、哲學の自我を内にして、本尊の自我を表として、世に見えたもので、自我實現の象徴として本尊を光顯し、そこに、あらゆる所信の正境を統一し、これに由て自己の自我實現の通り、眞的體驗、善的體驗、美的體驗の世界を造り出ださうとして努力され、而して努力を拂つて到達すべき體驗世界の目標、即ち、理想主義の程度は自己の自我實現の象徴たる本尊と、同量同質のものでなければならぬ。隨つて宇宙を擧げて、本尊に歸命せしめ、そこに正義的眞理體驗の世界を造り上げ、世界各國の民衆を本尊に拜跪せしめ、更に人道的善の體驗世界を築きあげ、近くは、日本國の上下を、皆この本尊に統一して、そこに人格的美の體驗世界を見出し、そして世界を理想化しやうとするに至るのである。この自我實現を望むで向上する主義を「廣宣流布」とも「一天四海皆歸妙法」とも云ふ。言ひ換へれば、世界統一を理想とするのである。この理想主義の信條を「三大秘法」といふ。これ

「本尊鈔」に

「一閻浮提第一の本尊を此國に立つべし。月氏震旦、いまだ此本尊あらず」 九四八

といはれ、同鈔「副狀」に

「佛滅後二千二百二十餘年、いまだ、此の書の心あらず」

と述べられ、圖顯の「曼荼羅」に

「此法華經の大曼荼羅は佛滅後二千二百二十餘年の間、一閻浮提の内、いまだ、これ有らず」

と稱へられ、「報恩鈔」には、實現の順序と内容の範圍とを兼ねて、

「日本乃至一閻浮提一同に本尊とすべし」 一五〇九

と告げられ「日女御前御返事」には、宣傳の旌印として、

「爰に日蓮いかなる不思議にてや候らん。龍樹天親等、天台妙樂等だにも顯はし給はざる大曼荼羅を、末法二百餘年の比、はじめて、法華弘通の旌記として顯はし奉るなり」 一六二五

と語られたる所以である。これに由て、自我實現の宗教としても、將又、理想主義の宗教としても、眞實と光明とに滿ち、洋々たる希望に輝いてゐることが察しられるであらう。

□

以上我日蓮聖人の宗教は、自我の確認に出發し、自我の實現にその終りを告げ、そして理想主義の努力を以て、世界人類を淨化して、そこに體驗の世界を見出さんとするのである。かゝる教義と信仰とを有する宗教は、現代の世界中他に之を見出し得ざるは無論にして「未曾有」と云ひ「始弘」と云ひ「始顯」と

云はれた我聖人の唱へが、果して誇稱であらうか。これを智に訴へても、情に訴へても、將又、意に訴へても、吾人は聖人に如同するの外はない。

しからば、聖人の門下として吾人は、果して荷ふた任務を遂行してゐるであらうか。回顧するに、我聖人去つて六百數十年を經るも、世界の人類中、幾人あつてか、我聖人の自我實現の境地に成つた闊浮統一の本尊の御前に拜跪するものがあるであらうか。我形式的教團の現狀を眞面目に反省したならば實に思半に過ぐるものがあらう。即ち量を以て之を云はゞ、苟も教徒と呼び得る者の全部を擧げて、僅々我國人口の三十分の一に過ぎず、若し世界の大人口に比すれば、正に大瀑布に於ける小飛沫、殆んど數の内にも這入れぬと云つて差支へはあるまい。小在屬無の論法を應用すれば、現在の日蓮宗は宗教としての存在を否認されても、敢て苦情を申立つる資格ありや否や。又質を以て之を云はゞ、僧俗共に、祖師が「當身の大事」を以て己が「當身の大事」と爲さず、或るは徒らに神秘的復古思想に捉はれて「時を習ふ」ことを怠るあり、或るは只々唾棄すべき淺薄な流行性の神經を露出して、麻醉的狂惑に彷徨し、「日蓮が魂」を冒瀆して敢て省みざるあり、殊に後者に至つては之を一般教徒に於ては見ざる所であるが、宗門最高の教育機關に學ぶ青年法子の中に於ける蔽ふべからざる濁流として之を看取せねばならぬことを吾人は痛恨せざるを得ない。祖師への絶對的讃仰の精神を築き上げないうちに、祖師の精神の現代的實現を云々するのは哀れにも餘りにソヽッカしい醜體だ。「腐敗墮落その極に達した宗門を正視しつゝ眞實、眞理の使徒たる面目を發揮して貰ひ度い」との吾人宗門の青年に對する識者の激勵と要求とは飽くまで日蓮の若き弟子達への尊い言葉であり、眞實の警告ではないか、宗門革新の根本的態度は、眞面目な祖師讃仰者に依つてのみ成されるのである。昔から「革新」は決して畸型兒に依つてなきれてはゐない。日蓮の弟子への充實した若き健康な誇りに燃えてこそ、佛國土建設の現代的方法が具体化されるのである。（立大主催全國大學高專雄辯大會三出席シテ見聞ス）

兎まれ、此慘めな宗門の現狀を省察するだけの宗教的良心があるならば、形式的な布教や儀禮や教育では、聖人の靈に對して恐らく申譯がなからう。

四圍の事情は殆んど事志と違ひ、我等の理想たる世界的淨化運動の目的成就も全く過去の夢物語りとなり果てたやうではあるが、我徒にして眞個、聖人の自我實現の本尊を遵奉する限り斷じてこの聖業を放棄すべきではない。否否、我聖人の遺された慈教に由つて修養し得た自我實現の信仰其物が、自覺の上の衝動として、この聖業を放棄するを許さない。これが先づ、自我實現の宗教を奉ずる我徒の死守する信條であらねばならぬからである。

人間性の支持と發展の思潮をこゝまで堀り下げ、生氣付けてこそ「必ず時を習ふべし」の祖訓を服膺するものであり、祖師の魂を現代に活かす幾分かの方法なりと信ずる。

即ち、吾人は、こゝに混迷せる思想航海の旗艦として、克く濟生到彼岸の重責を果すに、必要にして且つ充分なるもの、名付けて「ニチレンズム」を提供し、高揚するものである。

以上

三ツ子の魂に與ふべきは？

加藤智學

近代科學文明の發達せる結果生じた經濟生活、精神生活の兩面に於ける不安と焦慮は民衆の恐怖である。その弱点を窺ひ、忍び寄る類似宗教の害毒著しき今日、我等のなすべき急務！それは聖祖が末法萬年への垂教、絶對的根本原理たる一大秘法の深奥を究明し、そが根本原理の絶對性をして實際化し聖祖の一大理想たる立正安國を實現すべく、布教線の擴張を計り、社會民衆の指導に當るべきである。而して社會民衆、それが組織する各階級の老若男女の中、私は特に兒童をして學校教育と相俟つて施さるべく、必要な宗教情操教育のそれに聖祖が精神を打込むべき必要性を述べんとするものである。先づその例として、身延立正子供會の沿革を一言すれば、宗祖が天竺の靈山、日域の比叡山にも勝れたる地として九ケ年の御生活があり、永へに魂を止むべき處なりとせられて經る事七百年、その不滅の靈光の輝きを仰ぎ、絶へざる法流を掬する身延に斯の如き事業施設の存するは餘りにも當然すぎるかも知れないが、それは本山當局の社會事業の一として大正十年聖誕七百年を記念するために產聲を擧げ、先輩諸氏の努力に依り十六年を經た今日は身延小學校八百の全生徒を會員として、毎週土曜日に開會せられ、（因みに創立以來講師は祖山學院生是を擔當す）尙此の外二三の支部を有してゐる。

私は此の會に關係を有し講師の末席を汚して得た、極く淺薄ではあるが、些かの經驗よりその必要を感じその一端を述べるものである。

純情無垢の童心は天眞爛漫、そのものにしてその鋭敏に且つ豊富なる感受性は未だ善惡を識別する能力を有しないのみか、それは環境に支配せられて、社會有爲の士たる素地を、時には社會を呪ふ反逆者ともなつて生長して行くのである。その大切な出發点、所謂三ツ子の魂へ投じてやるべきは、正しき智慧で